

## －住戸タイプとライフステージによる生活行為の行われ方－

○伊藤香織 沖田富美子 (日本女大)

**目的** 今日、住宅の洋風化により、家族員の生活の中心となるダイニングルームやリビングルームを持つ住宅が主流を占めているが、これらの空間以外に畳の部屋が一室は欲しいという要求も根強い。そこで本研究では、ダイニングルーム、リビングルーム、および和室を家族生活空間として捉え、各空間における生活行為の行われ方が(39種類の生活行為)、住戸タイプおよびライフステージなどにより影響を受けるか否かについて検討する。

**方法** 東京圏および名古屋圏の商品化住宅の居住者を対象に、LD+Kに和室が隣接した住戸(Aタイプ)、LD+Kのほかに和室が独立した住戸(Bタイプ)の2つを選出し、アンケート調査を実施した(1997年8～9月)。調査配布数は365件、回収数288件、有効回答数279件、本研究対象数は189件である。なお長子の年齢により、ライフステージを乳幼児期(0～5歳)、学童期(6～12歳)、学生期(13～18歳)、青年期(19歳以上)の4つに分類する。

**結果** 各ライフステージにおける住戸タイプによる比較からは、4つのライフステージ全てにおいて、和室の使われ方に違いが見られた。すなわち、Aタイプ居住者の方がBタイプ居住者よりも和室を日常的に使用している。特に乳幼児期および学童期のAタイプ世帯にその傾向が見られ、<団欒余暇>、<余暇趣味>、<身だしなみ>、<家事2>行為の発生率が高い。またライフステージによる比較からは、Aタイプ住戸では学童期世帯で<勉強・仕事>にダイニングまわりを使用していること、Bタイプ住戸では青年期世帯で和室を<宿泊>に使用していることが特徴として挙げられる。全体的には、ライフステージ前半の家族ほど様々な行為を各空間で行っているが、ライフステージ後半の家族になるとその行為数は限定されている。